



書評

[評者]

松本 俊彦

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長

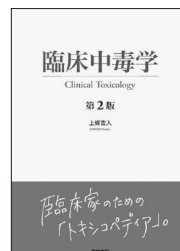
# 臨床中毒学 第2版

上條 吉人 著

●B5 頁696 2023年11月

定価：14,300円(本体13,000円+税10%)

[ISBN978-4-260-05220-7] 医学書院刊



今日、臨床医学において self-poisoning (毒物もしくは過剰量の医薬品を故意に摂取すること) は重要課題の1つだ。その行為は、自殺目的から行われる場合もあるし、心理的苦痛を紛らわせるため、あるいは、居場所のない者同士が孤立を解消し、仲間との絆を深めるために行われる場合もある。誤って服用するといった事故として発生する場合もあろう。いずれにしても、self-poisoning という現象は、救急医療・自殺予防・依存症医療を横断する問題であり、その治療や再発防止には救急医療と精神科医療との緊密な連携が欠かせない。

本書の著者は、当初、自身の医師としてのキャリアを精神科医から開始し、途中で救急医へと転じ、評者の認識では「臨床中毒学」という医学分野の創始者だ。実際、自殺予防と薬物乱用・依存に関する研究において、著者は文字通り「余人をもって代え難い」存在であり、評者も何度となくさまざまな研究プロジェクトで著者の助力を仰いできた。

最近十年を振り返っても、刻一刻と乱用薬物に変遷するなかで、著者と協働して行った研究は少なくない。危険ドラッグやベゲタミン錠による健康被害、そして最近では市販薬過剰摂取による健康被害……。こうした研究活動のなかで、私たちは、精神科医の安易な多剤大量処方への憤りや、危険な成分を含有する市販薬を販売し続ける製薬企業への疑問を共有してきた。のみならず、問題解決を求めて、一緒に厚生労働省へと陳情に出向いたこともあった。も

はや「同志」もしくは「戦友」と言ってよいだろう。

言うまでもなく、そのような活動を展開してきた著者にとって、2009年に刊行された『臨床中毒学』はそのキャリアにおける最高到達点だった。同書は、診療のなかで遭遇し得るあらゆる毒物や依存性物質を網羅し、その薬理学的特徴のみならず、典型的症例や治療法まで提示されていたのだった。どう逆立ちしても薬学の基礎研究者には書くことのできない無双の書、かつてない唯一無二の書として、刊行以来、多くの臨床医に愛されてきたのだった。

そして今回、満を持しての第2版刊行であるが、決して誇張ではなく、著者は軽々と自身の最高到達点を更新しているのだ。それもそうだろう。この14年間、わが国にはあまりにも多くの出来事があった。危険ドラッグ乱用禍と、その鎮静後に増加した急性カフェイン中毒、さらに近年では、若年女性を中心に増加する市販鎮咳薬・感冒薬の過剰摂取、そして、「大麻グミ」(大麻成分類似物質)のような新たな脱法的薬物の登場……。第2版には、これらの問題と最前線で向き合っ

たばかりの臨床医必携の書だ。すでに初版をお持ちの方は急ぎ第2版を購入し、知識のアップデートを図っていただく必要がある。まだお持ちでない臨床医の先生は、現代医学における重要課題の1つ、self-poisoning と向き合うべく、直ちに本書を入手しなければならない。